

## 福祉的支援を要する猫多頭飼育事例への多機関連携について

○浦野 絵梨<sup>1)</sup>、石黒 奈央<sup>2)</sup>、松沢 寿次<sup>2)</sup>、細江 昭史<sup>2)</sup>、橋井 真実<sup>1)</sup>、  
小平 満<sup>1)</sup>、松澤 淑美<sup>1)</sup>

<sup>1)</sup> 長野県動物愛護セ、<sup>2)</sup> 長野県上田保

【はじめに】 長野県A市で福祉的支援を要する家庭において猫の多頭飼育3事例が発生した。A市社会福祉協議会（以下、「社協」という。）、A市福祉課、A市生活環境課、動物愛護団体、保健所、長野県動物愛護センター（以下、「ハローアニマル」という。）が連携して対応する中で、ハローアニマルは猫の学習会を担当し、今後の連携強化と継続支援につながったので報告する。

【経緯】 3事例中2事例は、社協、A市福祉課が子どもの支援を実施している中で猫の多頭飼育を確認した。社協が動物愛護団体に相談し、動物愛護団体から保健所に情報提供があった。残りの1事例は飼育者の親戚から保健所に猫の多頭飼育について相談があった。3事例とも猫を室内で数十頭飼育し、不妊・去勢手術をしておらず、室内に糞尿が放置されている状態であり、猫の多頭飼育だけではなく複数の問題を抱えていたため、関係機関が連携して対応することとなった。問題解決の対応策として、生活支援を社協、A市福祉課、A市生活環境課が実施し、猫の不妊・去勢手術、譲渡先探し等を動物愛護団体が担い、猫の適正飼養指導を保健所が行うことで、関係機関が支援の輪を形成した。社協より、飼育者に対する猫に関する知識の習得について要望があり、ハローアニマルに猫の学習会の開催依頼があった。

【結果】 猫の学習会は「ネコのきもちセミナー」と命名し、飼育者と関係機関が一堂に会した。福祉的支援の対象者向けに、支援ではなく「応援」という雰囲気、猫の気持ちを飼育者に考えてもらえるような分かりやすい内容とした。また、参加型の企画や猫の行動観察等も行い、飼育者と関係者が話しやすい環境の中で、飼育者が「楽しかった」「来てよかった」と思える工夫をした。学習会の最後に行ったアンケートでは、飼育者は学習会を好意的に受け止めていた。飼育者は多方面からの支援により、猫の飼養管理について理解が進んだ。

【まとめ】 関係機関が円滑に連携し情報共有を図りながら、担当する専門分野から飼育者を支援することで、猫の飼養管理の改善と飼育者の生活支援を同時に進めることができた。猫に対する適切な知識の不足が多頭飼育につながっており、様々な工夫をこらし関係機関が一堂に会した猫の学習会は有効であった。